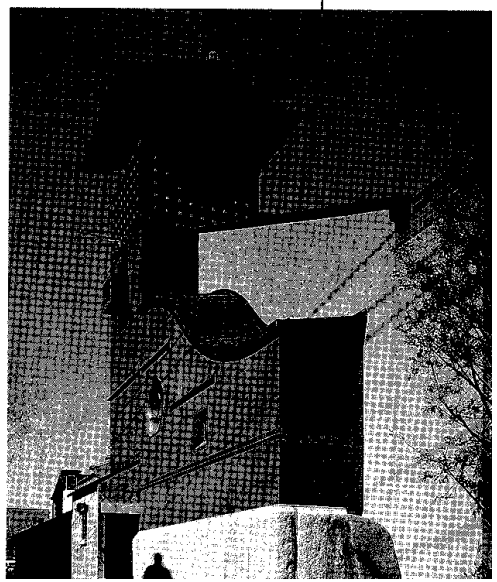
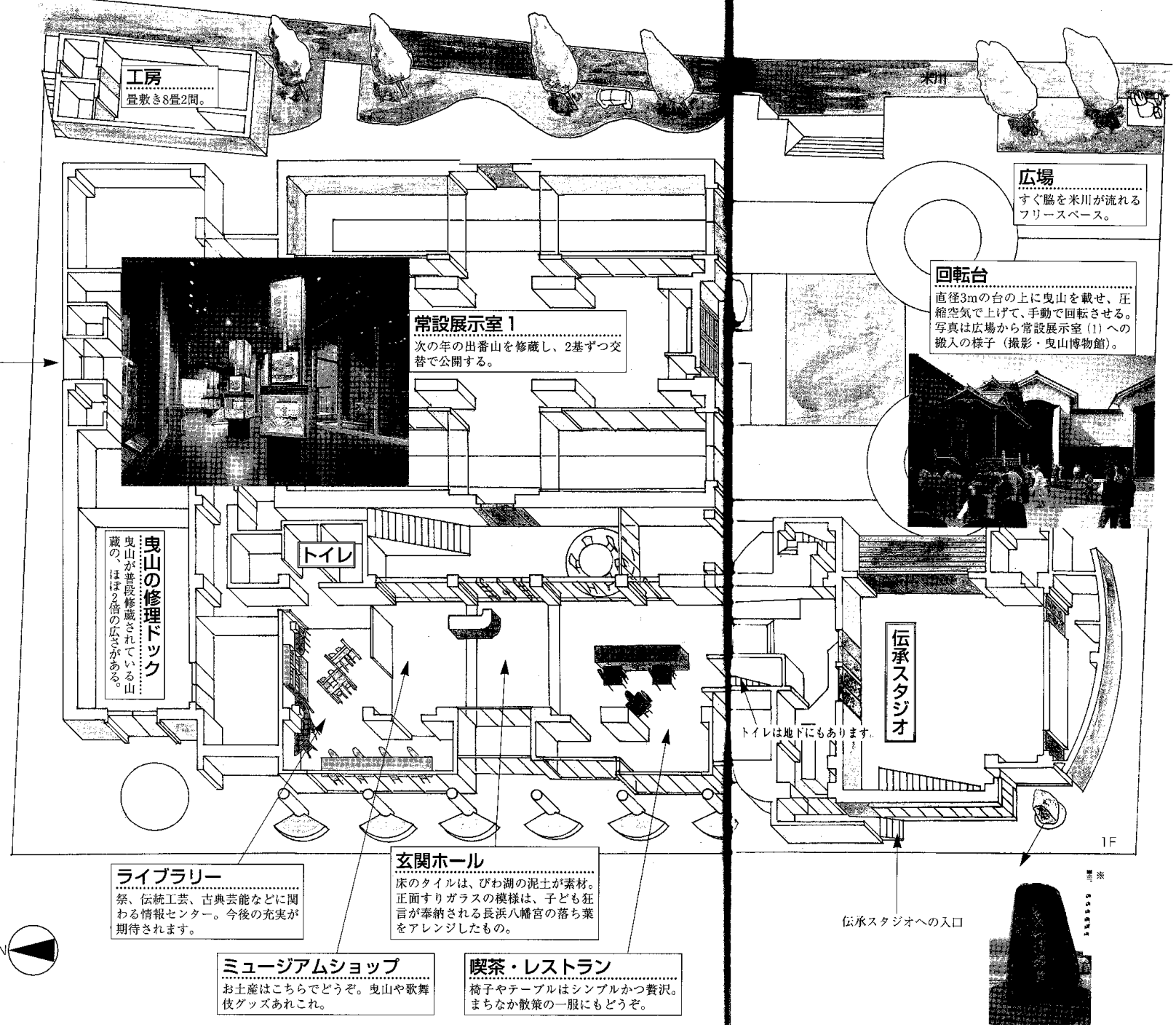
御目見得！ 曳山博物館

特集1 館内お披露目

いよいよ曳山博物館がオープンした。
黒壁ガラス館本館からふたすじ東。すっくと建つ黒っぽい外壁。
重厚な蔵の雰囲気を漂わせるなかに、曲線のリズム感……。
東へまわれば、広場が現れる。米川の流れと白壁の蔵。
館内には曳山の実物が展示され、曳山祭りを育み継承してきた長浜の街の真髄にふれられる。
……街なかに現われた不思議空間をご案内しましょう。





特集2 市民と歌舞伎

子ども歌舞伎伝承修業塾「三役修業塾」を訪ねて

三役をふたたび地元の人の手で…

▲市民会館での舞台に上がった塾生たち
左から太田さん、金沢さん、瀬田さん、下村さん（平成10年）

歌舞伎は演じるたびに新しい演出

子ども歌舞伎は、長浜曳山祭りの華です。でも、子どもたちが曳山の舞台で歌舞伎を演ずるには、さまざまな人たちの陰の努力が必要です。長浜曳山祭りの三役さんも、大切な人たちです。

本歌舞伎では、舞台の左袖に太夫と三味線が座り、浄瑠璃を語り三味線を弾きます。曳山の場合は、舞台が狭いため、舞台正面の御簾（みす）のうしろに太夫と三味線が控えています。この太夫と三味線に振付師を加えた三人を、曳山祭りでは三役と呼びます。

振付師とは、文字どおり子どもたちに芸の振り付けをする人のこと。本番までの一カ月近く、子どもたちは、振付師に一から芸を学びます。すばらしい芸に仕上げるには、振付師の腕が大きな比重を占めるわけです。振付師は、脚本家であり、演出家であり、舞台監督でもあります。歌舞伎の出し物は時代物や世話物などたくさんありますが、ストーリーは決まっていても、振付師がアレンジする部分がかなりあります。歌舞伎は演じられるたびに新しい演出がなされるのです。

曳山祭りは豊かな地域文化の発露

いつも新しいことが歌舞伎の命。ですから、太夫や三味線は、振付師の意をくみ取って、自在に舞台を盛り上げなければなりません。振付師と息が合った人が求められます。

山組の役員は、まず次の出番の振付師を依頼します。次に、振付師が太夫と三味線を推薦して、三役さんが決まります。

▲三味線と語り、一緒に稽古をつけてもらう

▲師匠から教わったことを書き込みながら……

▲三味線の楽譜。ウーム、不可解!?

次は出し物です。台詞（せりふ）が延々と続くものは、子どもは不得手ですし、曳山の舞台は広さが限られています。これらを考慮しながら、振付師が得意とする十八番（おはこ）のなかから出し物が決められます。そして、出し物と出演する子どもたちの顔ぶれを見ながら、役者が決まるわけです。

このように、曳山祭りを行うには三役さんの役割がとても大切なのですが、数年前までは愛知県や四国などから招いているのが現状でした。

戦後しばらくまでは、湖北地方にも三役さんをつとめる人が幾人もいました。歌舞伎を演じ、浄瑠璃を語り、三味線を弾くという文化が、日常のたしなみとして生きていたのです。長浜曳山祭りは、そんな層の厚い文化の土壌のなかで磨かれた結晶であり、豊かな地域文化の発露でもあったわけです。

▲師匠の豊澤千賀竜さん

◀魚屋さんが本業の下村浩司さん

塾生の中からプロの道を歩む人も

そこで、本来の祭りの姿を取り戻そうと、平成元年にふるさと創生事業のひとつとして子ども歌舞伎三役修業塾が開設されました。地元で三役を担える人材を育てていこうというわけです。以来、名古屋から講師として豊澤千賀竜さんを招き、週に一度、昼と夜の二部制で塾が開講されています。

開講から十年以上が経ち、若い塾生のなかからは、プロへの道を歩んでいる人も現れました。河瀬征弘さん（26歳）と西邑晃一さん（25歳）は、国立劇場の竹本養成所で三味線の修業にはげみ、現在、松竹所属の研修生として、全国各地を興行しています。

県外から招へいしている三役さんは、プロばかりというわけではありません。多くがほかに職業を持っているセミプロです。三役修業塾で学ぶ人たちのなかにも、そんなセミプロをめざす人たちが何人かいます。

長浜市の中心商店街で鮮魚商を営む下村浩司さん（39歳）もその一人。地元の山組である鳳凰山や、地元の商店街のイベント「ゆう歌舞伎」で三味線を弾くだけでなく、米原町、垂井町や小松市の曳山祭りなどにも招かれるまでになりました。昨年十月に岐阜県で開かれた国民文化祭ぎふ99地歌舞伎垂井大会にも参加しています。

三味線の音一つで舞台が盛りあがる

岐阜県には地芝居（芝居小屋を持つ座持ちの歌舞伎。農村歌舞伎とも言う。）が現在も五カ所あり、浄瑠璃が盛んな地域。眼の肥えた人たちがたくさんいます。そんな地芝居のひとつから声がかかって、出演したときのこと。

「三味線の弾き方次第で舞台が変わってしまう。そんな弾き方では芝居ができんと言われましてね。歌舞伎の奥深さを思い知らされました」と、下村さんは言います。

三味線の楽譜は、指を押さえる所が記されているだけ。舞台の雰囲気にあわせて、ときには軽快に、ときには悲しく響く音色を出さなければなりません。三味線の音ひとつで、舞台が盛りあがるわけです。

「若い人は、小さいころから音楽に親しんでいるので飲み込みが早い。下村さんもほんまに上手にならはった。これからでも、やってみようという方は、いつでも見に来てほしい」と、塾生のひとりである小池市郎さん。

現在塾生は二十代から九十才まで十五人。六角館で毎週水曜日に練習が行われていますが、曳山博物館にも稽古の場が用意されました。祭りを支える人の輪が、もっと広がることを願っています。

（きよ）